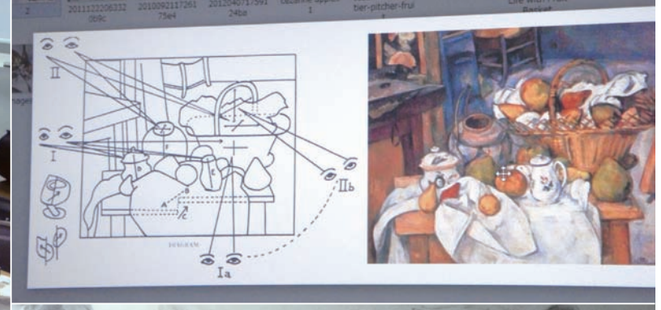
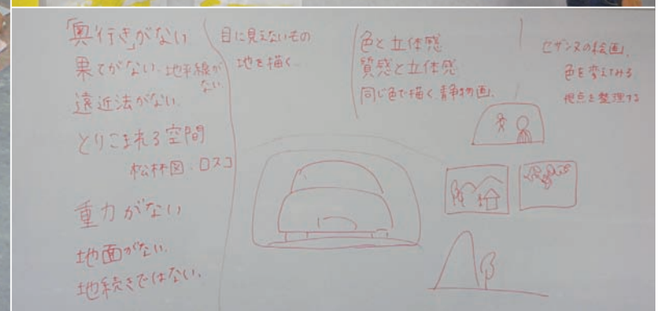
世界は黄色

ハリハリ空間

―奥行きの感覚を求めて―





目　次

Ⅰ. 私たちは何をしてきたのか —— テーマ演習「奥行きの感覚」
…中ハシ克シゲ　004

Ⅱ. 座談会：奥行きのポリフォニー —— 奥行きをめぐるさまざまな声　007

Ⅲ. 視覚の実験、造形の検証 —— ジャコメッティから奥行きへ　031
・ジャコメッティの奥行き　…中ハシ克シゲ　052
・びっくりジャコメ　…藤原隆男　054

Ⅳ. 奥行きについての考察と制作 —— 院生たちによる報告
1. 屏風と奥行き —— 日本美術史の視点を交えて
…町田藻映子（話：田島達也）　060
・なんでも屏風　066
2. 世界は黄色 —— 一色だけで描けば　…川端あす香　067
3. ハリハリ空間 —— 素材とともに空間を追う…小林紗世子　072

Ⅴ. 論考：奥行きを考える —— さまざまなポジションから
1. 素材と奥行 —— 鉱物絵具と西洋近代絵画の接地点　…小島徳朗　080
2. セザンヌの模写　…中ハシ克シゲ　088
3. 仏像の奥行きについて
彫刻の奥行きと仏像座像　…中ハシ克シゲ　090
宝菩提院菩薩半跏像をめぐって　…礪波恵昭　092
宝菩提院の半跏像彫刻　…中ハシ克シゲ　095
4. 奥行試論：陶磁器の奥行 —— 形態学を通して　…重松あゆみ　098
5. 世界のボリュームとしての奥行き
—— メルロ＝ポンティと〈世界の誕生〉　…魚住洋一　106
6. 進化と奥行感　…藤原隆男　114
7. 奥行きを「み」る —— 医療工学の視点から　…富田直秀　122

Ⅵ. おわりに —— 制作を通して学ぶこと　…小島徳朗　127

2012–13 年度 京都市立芸術大学美術学部・テーマ演習「奥行きの感覚」報告　129

付録 1. びっくりジャコメ　143
付録 2. なんでも屏風　145

世界のボリュームとしての奥行
―メルロ＝ポンティと〈世界の誕生〉

魚住洋一

1.

モーリス・メルロ＝ポンティは、その最後の著作となった『眼と精神』の冒頭に、ポール・セザンヌがジョワシャン・ガスケに語ったという言葉を引用している。――「私があなたに翻訳してみせようとしているのは、もっと神秘的であり、存在の根そのもの、感覚の感知しがたい源泉と絡みあっているのです」[1]。ここにいう「存在の根そのもの」（les racines mêmes de l'être）、「感覚の感知しがたい源泉」（la source impalpable des sensations）とは、メルロ＝ポンティがその生涯を通じて見究めようとしたものではなかったかと思われる。

メルロ＝ポンティは、『知覚の現象学』のなかで、すでにこう書いていた。

> 私は、自分の出生または死の意識以上に、私の感覚の真の主体であるという意識をもつことはない。私の出生も私の死も自分の経験として私の意識に現われるはずはない。……したがって私は、私を〈すでに生まれている〉とか〈まだ生きている〉としてしか捉えられない。……いっさいの感覚は、厳密に言ってその種の最初のものであり最後のものであるし、そして唯一のものであるからには、一種の出生であり死である。感覚を経験する主体は……自分に先立つことも自分より生き延びることもできない以上、感覚は必然的に一般性の場のなかで現われてくるのだし、私自身の手前から発するのである。……感覚を通して私は、私の人称的生（ma vie personnelle）や私の本来の行為の辺縁に、それらが現われ出る源泉であるところの或る意識の生を捉える、つまり、私の眼の、私の手の、私の耳の生……を捉えるのである［PP 249f.: II -22］[2]。

ここで彼は、「私」の誕生に先立つ一つの「感受性」（sensibilité）の覚醒について語っている。想像してほしい――私たちの過去を遡って、その記憶の彼方にあるはずの或る瞬間、はじめて私たちの身体に感覚が宿ったその瞬間のことを。漆黒の暗闇のなかにはじめて光が差し込むときのように、私たちの身体のなかで視覚や聴覚や触覚が蠢（うごめ）きはじめ、私たちのまえに物たちの姿が微かにおぼろげなかたちで現われようとするまさにそのときのことを。メルロ＝ポンティが見究めようと企てたのは、そうした「私たちにとっての世界の誕生」、「世界が現われ出る始原的な経験」にほかならなかったのである［PP 296: II -78f.］。

言うまでもなく、彼のこの企ては不可能な企てである。私たちは、私たちの身体にはじめて感覚が宿るその瞬間など、けっして記憶しているはずもないのだから。三島由紀夫は、その半ば自伝的な『仮面の告白』の冒頭で、「自分が生れたときの光景を見た」と述べ、「産湯（うぶゆ）を使はされた盥のふちのところ」にほんのりとさしていた光の記憶について語っていた[3]。しかし、すべての記憶は贋造されたものだと語るフロイトでなくとも、三島のその記憶が「贋造された記憶」であることは明らかだろう。私たちは、私たちの感覚の「誕生」のときをけっして憶えてはいないのだ。

だから、メルロ＝ポンティの企ては、きわめてアンビヴァレントな企てである。彼が現象学者――さまざまな事象を私たちに現われるがままの姿に引き戻して記述しようとする現象学者であるだけに、この企ては一層アンビヴァレントなものとなる。何かが私たちにとって現われてくるその姿をそのまま言葉にすることは一見、容易に見える。有名なエピソードを引き合いに出すなら、パリのカフェで、レイモン・アロンがサルトルに「ほらね、君が現象学者だったら、このカクテルについて語れるんだよ、それが哲学なんだ！」と語ったような、私たちの具体的経験に即しつつ語ることこそ現象学なのだから。しかし、メルロ＝ポンティが企てたのは、物たちが現われてくるまさにその最初の瞬間をいわば「現場で」取り押さえようということなのだ。――ここには、現象学者と自ら名乗る者なら、当然突き当たってしまうディレンマがある。というのも、私たちに対して現われるさまざまな物たちは、その現われの歴史を私たちの記憶の彼方へと追い遣りながら、つねにすでに現われてしまっているのであって、現われつつあるその進行中の姿など、私たちはけっして手中に収めることができないからである。だから、それを追求しようとするならば、私たちに現われるものだけを記述しようとする現象学的記述から逸脱することになってしまう。メルロ＝ポンティが「知覚の現象学」（la phénoménologie de la perception）から、あと一歩で形而上学的思弁に堕しかねないような「肉の存在論」（l'ontologie de la chair）へとあえて歩みを踏み出したのはそうした苦渋の選択のためだったかと思われる[4]。

ところで、メルロ＝ポンティは、いくつもの箇所でセザンヌやクレーについて熱っぽく語っている。しかし、彼がそのように画家たちに思いを馳（は）せるのは、けっして目撃することのできないこの「世界の誕生」を、彼らがカンヴァスのうえに実現させようとしていたからではなかろうか。メルロ＝ポンティによれば、セザンヌが描こうとしたのは、「生まれ出ようとしている秩序、私たちの眼前に立ち現われ形をなしつつある対象」だったのである［DC 20:18］。彼はまた『眼と精神』のなかで、「画家は山

に何を求めているのだろうか。それは、山が私たちの眼前の山となる手段、ほかならぬそれ自体もまた目に見える手段を発見することである」と述べ、「絵画の問い掛けは、私たちの身体のなかでのこの密やかで熱っぽい〈物の出現〉を目指しているのだ」と語っている［OE 28-30:264f.］。彼は同じ箇所で、こうも述べている。――「画家の眼差しは、およそ物を突如出現させるには、光や明るさがどうなっていればよいかをそれらに尋ね、また世界というこの不思議なものを組み立て、〈見えるもの〉（le visible）を私たちに見せるようにさせるには、物がどうなっていればよいかを物に尋ねるのだ」と。

してみると、画家の営みとは、いわば「タブラ・ラサ」にすぎない空白のカンヴァスのうえに「見えるもの」を出現させるという一種の奇蹟を成し遂げようとする企てではなかろうか。メルロ＝ポンティは、「ある全体的な可視性」（une visibilité entière）の野がそこに開かれてはじめて、「見えるもの」は「見えるもの」となるのであり、しかもそうした可視性の野はそのつど作り直されるのだと述べていた。だとすれば、「光、明るさ、影、艶（つや）、色彩」など、彼のいう「山が私たちの眼前の山となる」手段を駆使して、そこに一個の可視性の野をあらためて作り上げ、サント＝ヴィクトワール山をそこに出現させようとするセザンヌの試みとは、サント＝ヴィクトワール山を「再現」（représenter）させるというよりは、むしろそれを新たに「現前」(présenter) させる――メルロ＝ポンティに倣って言えば、「見えるものを模倣するのではなく〈見えるようにする〉」ものだと言えよう。こうした物言いは、誤解を招くものかもしれない。しかしメルロ＝ポンティに言わせれば、絵を前にするとき、私たちは絵を見ているのではない。むしろ、絵（ス）に（ロ）したが（ン）って、絵（アヴェック）とともに見ているのである［OE 23:261］。だが、いったい何を、なのか？ ――サント＝ヴィクトワール山の出現そのものを、である。彼はこう述べている。「母の胎内にあって潜在的に見えるものにすぎなかったものが、私たちにとってと同時にそれ自身にとっても見えるものとなる瞬間、一人の人間が誕生したと言われるが、その意味では画家の視覚はたえざる誕生なのである。……セザンヌが描こうとした〈世界の瞬間〉（l'instant du monde）、それはずっと以前に過ぎ去ったものであるが、彼のカンヴァスは私たちにこの瞬間を投げかけ続けている。そして彼のサント＝ヴィクトワールの嶺は、世界のどこにでも現われ、繰り返し現われてこよう。エクスに聳える固い岩稜とは違ったふうに、だがそれに劣らず力強く」と［OE 32-35:266–268］。

2.

メルロ＝ポンティは、『眼と精神』のなかで、「セザンヌは、生涯、奥行を追及しつづけたのだ」というアルベルト・ジャコメッティの言葉を引用している。また彼は、「奥行とは……〈物がそこにある〉という言い方で一言で言い表される〈ボリュームというもの〉（voluminosité）の経験であって、セザンヌが奥行を追及するとき、彼は〈この存在の燃え広がり〉（cette déflagration de l'Être）をこそ求めていたのだ」とも書いている［OE 64f.:285f.］。ここにいう「この存在の燃え広がり」という言葉が思い起こさせるのは、暗闇のなかに火が点（とも）り、それが瞬く間に燃え広がってさまざまな物の姿を浮かび上がらせていく、そうした光景ではなかろうか。それはまさに、メルロ＝ポンティのいう「私たちにとっての世界の誕生」の光景であろう。だとすれば、ここで語られている「奥行」（profondeur）とは、通俗的に理解される「奥行」以上のものだと言わねばならない。『知覚の現象学』から晩年の『眼と精神』や『見えるものと見えないもの』まで、「奥行」というこの言葉は随所に出てくる。はたして彼は、「奥行」という言葉で何を語ろうとしたのだろうか。

『知覚の現象学』や『眼と精神』では、「奥行」について語った箇所で、メルロ＝ポンティは、ルネ・デカルトやジョージ・バークリーの「奥行」概念を批判することから、語りはじめている。ここではまず、デカルトの『屈折光学』への彼の批判を見ていくことにしよう。

デカルトは『屈折光学』[5] のなかで、盲人は「手で見る」と語ったが、彼は、視覚を接触作用として、つまり、盲人の杖の先に物が触れる場合のような作用として考える。彼にとって視覚のモデルは、「触ること」なのである。さらに彼によれば、「見ること」は、光線がボールのように眼に飛び込んできて網膜上に生じた何らかの結果を「思考」によって解読することにすぎない。つまり、デカルトにとって、見ることは眼における一種の接触作用とそれを機縁として起こる精神の思考作用に還元されてしまうのである［OE 36–41:269–272］。メルロ＝ポンティは、デカルトは見ることを「見ているという考え」(la pensée de voir) に還元してしまったと述べている［OE 54:279］。

デカルトとは違って、私たちに見えるがままのものに即して考えようとするメルロ＝ポンティは、接触作用ならざる視覚の「遠隔作用」（l'action à distance）、その「遍在性」（ubiquité）について語る。――「視覚によって私たちは太陽や星に触れ、私たちは至るところに、手近なもののもとにも遠いもののもとにも同時に居るのだ」［OE 83:296］。

「奥行にはどこか逆説的なところがある。相互に重なり合い、したがって相互に隠され合って、よく〈見えない〉いくつかの対象を、私は〈見る〉ことになるからである。つまり、私は奥行を見ているのだが、それは実は見えないはずなのだ」とメルロ＝ポンティは言う［OE 45:274］。しかし、この不可解さは、デカルトによれば偽の不可

解さなのだ。彼によれば、私たちは実際には奥行というものを見てはいないのであり、もし見ているとしても、それは「横から見た幅」（la largeur considérée de profil）にすぎないからである[6]。私たちが奥行を見ていないというのは、私たちの網膜が平面的な投影しか許さず、そこには奥行は縮約されたかたちでしか現われないからだし、私たちが奥行を見ているということも、横に回れば互いに隠しあっていた物が並んでいる姿を見ることができることを、私たちが「知っている」ということにすぎない。デカルトにとって、絵画における遠近法的投影と「普通の知覚において物が私たちの眼に描きこむはずの、いや現に描きこんでいる投影図」は同類項として理解される。レオン・バッティスタ・アルベルティは、画面とは「開かれた窓」（fenestra aperta）であると語ったが、絵というこの二次元の存在でさえ、奥行を私たちに見せてくれるではないか。絵が「それに欠けている次元が十分に見分けられるような徴標（シーニュ）を、高さと幅だけで与える」ということを考えれば、「〈奥行〉とは、他の二つの次元から派生する〈第三の次元〉にすぎない」ということになる［OE 44f.:273］。

しかし、奥行が「横から見た幅」にすぎない空間があるとしても、そうした等方性（isotropie）、均質性（homogénéité）の空間に達するためには、私たちは世界のうちでのその視点を捨てて、自分が神のようにいわば遍在していると考えなければならない。いっさいの視点を超え、隠蔽性やボリュームをもたないそうした空間は「上空飛行的思考」（la pensée du survol）によって考え出された理念的空間にすぎない。――もっともそれは、直交座標系からなるいわゆる「デカルト空間」を構想し、解析幾何学を発明したデカルトにふさわしい空間ではあるけれども……。メルロ＝ポンティは、デカルトは「空間を、いっさいの〈視点〉、いっさいの〈隠蔽性〉（latence）、いっさいの〈奥行〉を超え、本当の〈厚み〉（épaisseur）をもたないもの」にしてしまったと語っている［OE 48:276］。

そう語るメルロ＝ポンティは、「〈見る者〉も、それ自体眼に見える〈身体〉によって〈見えるもの〉のうちに浸りきっているのだ」との言葉からも知られるように、あくまでも私たちを身体に受肉した存在と考える［OE 18:258］。彼が次のように述べるのも、そのためである。「空間は、空間性の零点ないし零度としての〈私〉から測られる空間である。私は空間をその外皮に沿ってではなく、内側から見るのであり、そこに包み込まれているのだ」［OE 59:282］。

メルロ＝ポンティは、『知覚の現象学』のなかで、横から見た幅に還元された「事物の間の関係」としての奥行の背後には、始原的な奥行としての「事物なき媒体の厚み」(l'épaisseur d'un médium sans chose) が見出されると述べていた [PP 308: II -93]。また、『見えるものと見えないもの』には、次のような謎めいた一節がある。

> 物そのものは、平板な存在ではなく、奥行をもった、上空飛行的主体には到達不可能な存在であり、もし可能ならば、同じ世界のなかで物と共存している主体にのみ開かれた存在なのだ。……肉的存在（être charnel）は、奥行をもち、いくつもの面や顔をもった存在、潜在（ラタンス）の存在、ある不在（アブサンス）の現前として、〈存在〉（l'Être）の祖形である。……立方体でさえすでに、おのれのうちに多くの両立不可能な可視体（visibilia）を糾合している。……見えるものと呼ばれるものは、木目（テクスチュール）を孕んだ質、ある奥行の表面、どっしりとした存在の切り口であり、〈存在〉の波に運ばれている一粒ないし粒子である。見えるものの全体は、つねに、私たちの見ている諸側面の背後やそのそばやそれらの間にある［VI 179f.:189］。

この一節には、世界が「見えるもの」となってそこから出現するその母胎を表そうとした「肉」（chair）という言葉が見出されるが、ここで語られているのは、「見えるもの」が「見えるもの」となるのは、そこに「見えるもの」の裏面としての「見えるものの見えないもの」があるからだということであろう。つまり、物たちをそこに現われさせながらも、自らはその背後へ退いていく「潜在の存在、不在の現前」、言い換えれば、「事物なき媒体の厚み」がそこにあるからだということであり、それをメルロ＝ポンティは「肉」、「世界の肉」と名づけたのである。立方体の知覚という卑近な例を取り上げても、私たちがそれを見るとき、見える面とともにつねに見えない面があり、私たちはそのすべての面をけっして同時に「両立可能（コンパティブル）」にすることはできず、立方体そのものは、それを所有しようとする私たちの眼差しからつねに逃れ去っていく。物はつねにパースペクティヴ的、一面的にしかその姿を示してはくれないのだ。しかし、『行動の構造』でかつて彼が述べていたように、逆に「もし立方体の全側面が一目で認識されうるとすれば、私はもはや、私の視察に徐々に提供されるような〈物〉に係わっているのではなく、私の精神が完全に所有する〈観念〉に係わっていることになろう。……知覚、すなわち、何かが現実に存在するということが把握されるために絶対に必要なことは、対象が、それに注がれている眼差しに全面的に与えられるのではなく、現在の知覚において目指されながらも、まだ所有されていないさまざまな面を保留しているということである」［SC 229f.:316f.］。――物が物であるのは、それが私たちの眼差しにけっして汲み尽くされることのない豊穣さをもつからである。物がつねに一面的にしか現われず、物たちが現われる際につねに互いを隠し合うのは、この豊穣さのためである。見えるものは、「ある奥行の表面」なのだ。「奥行」を表す “profondeur” が文字通りには「深さ」だということを思い起こすべきだろう。それは、私たちが汲み尽くすことのできない世界の深み、しかも、汲み尽く

しえないがゆえにこそ、そこからつねに世界の新たな相貌が私たちに授けられることになる世界の深みなのだ。ライナー・マリア・リルケがどこかで語っていた言葉を私は思い出す。――「世界は広大だ。しかし、われわれのなかでは、それは海のように深い」。

「奥行」がメルロ＝ポンティにとってこのような世界の深みだとすれば、それをもはや「第三の次元」などと呼ぶことはできない。彼はこう語っている。「奥行が次元といったものの一つならば、むしろそれこそ第一の次元であることになろう。……しかし、第一の、しかも他の諸次元を包含するような次元は、もはや一つの次元ではない。……このように理解された奥行は、むしろさまざまな次元の換位可能性（reversibilité）の経験そのものなのだ。つまり、すべてが同時にあり、高さ・大きさ・距離がそこからの抽象でしかないような全体的な〈場所〉（localité）の経験であり、〈物がそこにある〉という言い方で一言で言い表される〈ボリュームというもの〉の経験なのである」［OE 64f.:285f.］。最後の一文はすでに引用したものである。「ボリューム」とは、物たちがそのうちに秘めた無限の豊穣さのことであろう。物たちをそこに出現せしめ、その豊穣さへ私たちを誘（いざな）ってくれる「次元」を開くものこそ、ここにいう「奥行」ではなかろうか。

メルロ＝ポンティは、セザンヌが晩年の作品で彩色せず残した空白について、「これらの空白は、〈黄色くある〉、〈緑である〉、〈青くある〉というよりももっと〈一般的なある〉を作り上げ、浮かび上がらせる働きをもつ」と書いていた［OE 68:287］。――「第一の次元」としての奥行とは、いわばセザンヌのこの「空白」、そこに色彩という次元を開き、物たちをカンヴァスの上に出現させてくれるこの「空白」に喩えることができるものであろう。

（うおずみ よういち・哲学研究室 教授）

注

[1] Joachim Gasque, *Cézanne*, Les Éditions Bernheim-Jeune, 1921, p.82
（『セザンヌ』與謝野文子訳、岩波文庫、2009 年、p.220）

[2] メルロ＝ポンティの著作からの引用は、以下の略号を用い、本文中の［　］内に、原著と邦訳のページ数をコロンで区切って表示する。ただし、翻訳については一部変更を加えた箇所がある。

SC：*La structure du comportement*, Presses universitaire de France, 1942.
（『行動の構造』滝浦静雄他訳、みすず書房、1964 年）

PP：*La phénoménologie de la perception*, Éditions Gallimard, 1945.
（『知覚の現象学』全 2 冊、竹内芳郎他訳、みすず書房、1967 年、1974 年）

OE：*L'œil et l'esprit*, Éditions Gallimard, 1961.（「眼と精神」、『眼と精神』滝浦静雄他訳、みすず書房、1966 年）

VI：*Le visible et l'invisible*, Éditions Gallimard, 1964.
（『見えるものと見えないもの』滝浦静雄他訳、みすず書房、1989 年）

DC：“Le doute de Cézanne,” in: *Sense et Non-sense*, Éditions Gallimard, 1996.
（「セザンヌの疑惑」、『意味と無意味』滝浦静雄他訳、みすず書房、1983 年）

[3] 三島由紀夫『假面の告白』初版、河出書房、1949 年、pp.3–5。

[4] メルロ＝ポンティの遺稿『見えるものと見えないもの』で用いられた「肉」という概念は、発芽した胚が双葉（feuillets）に分かれていくように、見るもの／見えるもの、感じるもの／感じられるものが二重化されてそこから現われてくるその母胎を表そうとするものである。彼は「感覚的なるもの」が出現するこうした事態を胞子嚢（のう）の裂開に喩え、肉の「裂開」（déhiscence）とも呼んでいる［VI 192:202］。しかし、これは現象学的に記述しうる事態ではない。

[5] René Descartes, La dioptrique (Six premiers discourse), in: *Œuvres et lettres*, Textes présentés par André Bridoux, Éditions Gallimard, 1953, pp.180–229.
（「屈折光学」青木靖三・水野和久訳、『デカルト著作集』第 1 巻、白水社、1973 年、pp.113–222）

[6]「横から見た幅」という言葉は、『知覚の現象学』のバークレー批判の箇所から採った［PP 295: II –77］。